

2019 年度第 3 回「豊岡市地方創生戦略会議」 会議録（要旨）

- 開催日時 2019 年 11 月 6 日（水）午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分
- 開催場所 豊岡市役所 3 階 庁議室
- 出席委員 中貝座長、中嶋副座長、嶋委員、尾崎委員、岡本委員、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣委員、高宮委員、宮崎委員、木村委員、西池委員、橋本委員
- 欠席委員 平田委員、村瀬委員、朝倉委員、
- 傍 聴 14 名

1 開会

2 中貝座長（市長）あいさつ

前回の会議で様々な議論をいただいたが、今日は、具体的な議論を進めていきたい。改めて、地方創生の基本をおさえたい。地方創生は人口減少対策である。「創生」の文言で地域活性化と誤解される。地域活性化は手段としては重要だが、地方創生は、人口減少を和らげることが目的である。仮にイベントをしてまちが元気になっても単独、あるいは他のものと組み合わせると、人口減少に役立たなければ、地域活性化としては成功だが、人口減少対策としては失敗である。

2040 年の目標人口が実現しても 2 万人の人口が減る。人口の緩和だけでは、終わらない。活力があることが必要。できれば、人口減少の緩和に役立つ同じ手段が人口が減っても活力のある質的な変化となる手段であることが望ましい。

国は、国の人口減少対策を地方創生として地方に任せている。国としての人口対策の取組みも必要であると考え。豊岡は豊岡で自分の課題として取り組んでいく。

2 議事

(1) 第 2 期地方創生総合戦略（素案）について

政策調整課から資料に基づき説明

座長 今後、第 2 期地方創生総合戦略案は、パブリックコメントを行い、来年の 2 月に策定する予定である。会議での議論は、本日が最後となるので、戦略素案、体系図素案について、具体的な意見を聞きたい。また、基本的な組み立てについての意見があれば、自由に議論いただきたい。

A 委員 新たな視点の中に、若い女性に選ばれていないと記載されているが、その理由として、豊岡は男性中心の社会であることが原因であるとされてい

る。それは、どういう議論でその結果になったのか。何かその根拠あるのか。豊岡だけが男性中心なのか。資料では、但馬内の女性が豊岡に来ていたという記載がある。私の職場では、オール但馬で、但馬の職員が働いている。そして職場内の若い男女が結婚し、利便性の高い豊岡に移住しており、数も多い。そう考えたときに、若い女性がどうしたら豊岡を選ぶのかについて、掘り下げができていないのではないか。

ワークイノベーション推進室職員

職場、地域、家庭で女性の居場所と出番が少ない実態があるが、都市では、ジェンダーギャップの解消がどんどん進みつつある。これは、地方全体が同じ傾向にあり、豊岡が突出して悪いわけではない。ただ、豊岡は都市部と比べて競争力が劣っており、女性に選ばれていない理由の一つだと考えている。

A 委員 一般論としては分かるが、他に比べて、特に豊岡が男性中心の社会なので選ばれていないとしか読めない。

座長 ジェンダーギャップの問題は、地方創生の会議ではなく、別の会議で3年ほど前から行っている。事業所でのジェンダーギャップの解消はワークイノベーション戦略としてまとめている。市役所内でも男女の格差が大きいので、キャリアデザインアクションプランとしてまとめている。現在は、家庭や社会のジェンダーギャップについて、調査しており、今後、解消するための戦略を策定する。その経過があるので、ジェンダーギャップの問題が地方創生戦略に入っている。2015年の若者回復率では、男性に比べて女性の回復率が非常に悪い。その原因を考えたときにジェンダーギャップの課題があることが分かった。豊岡市の地方創生総合戦略なので、豊岡が、となっている。実際に豊岡のジェンダーギャップについては、男女別平均収入額の差、正規職員の割合の差、管理職への登用の差などのデータもある。市役所では、特に40歳以上の職員の男女差、経験した職務の差があり、スキルの低さにつながっている。この状況から果たして、若い女性が帰ってきたいと思うのか。また、育児や介護を圧倒的に女性が担っているところに、女性が帰ってくるのか。女性が帰ってきていない数字の背景に何があるのかを分析した結果である。

A 委員 若い女性が住みつづける理由は、地位や給与ではないと思われる。ジェンダーギャップと若い女性が帰ってくる理由とが繋がっていないと思

われる。

副座長 大学卒業時に住む場所を何が条件で決めるのかは、仕事になる。その仕事を決める背景にジェンダーギャップがある。優秀な学生ほど多くの選択肢を持っている。一般論は強く影響しており、その一般論は、最初から地方で働くことが念頭にもおかれていない。一般論が変わらなければ、最初から選択肢の中にも入ってこない。

座長 ジェンダーギャップが小さい都道府県ほど女性の定着率が高いというデータがある。ジェンダーギャップを何で測るのかもあるが、女性が女性であるということだけで様々な事を断念することがない社会に女性が定着する。子どもの数は、共働き家庭の方が多いというデータもある。出生率の低い東京が最も子どもの数を増やしている。それは、女性が増えているからである。様々なデータから豊岡市ではジェンダーギャップに手を付けようとした。

副座長 ジェンダーギャップは、豊岡だけではなく、日本全体を含めた問題である。ただ、豊岡は、そこに人口減少の課題があると考えて、地方創生の人口対策の活路を見出すということである。
具体的に何を換えようとするのかは、丁寧に考えないといけない。男性のように働く女性を増やす形で社会進出をさせると、より悪化する。男女のバランスを少し変えることが必要である。

B 委員 ジェンダーギャップの課題は、豊岡だけではないが、豊岡が女性に選ばれ、そして子どもが豊岡に残るかどうかは、豊岡でいきいきと楽しんで暮らす姿があることが大切である。特に、女の子にとって、帰ってきたいと思うまちとは、自分のお母さんの姿が楽しんで暮らしているのかどうか、いきいきと働いているのかどうかにある。女性に多くの選択肢があるのかどうか。孫を預かる祖父母の考え方も変わってきているが、周囲の理解や協力も十分ではない。お母さんがいきいきと暮らすためには、女性にも選択肢があることが大切である。

C 委員 女性にとっても働きがいがあり、働きやすい職場にしていくことが豊岡市の人口減少に効果があると信じて取り組んでいる。我々の世代は、ジェンダーギャップといわれると本当にそうなのかとってしまうが、研修や現状調査などの分析をする中で、無意識の偏見があった。企業側も意識的

に女性がもっと活躍できるように取り組んでいる。

A 委員 採用試験の若い女性が面接のときに、コウノトリ育む農法が素晴らしいので応募したという人が多い。働きがい、生きがいを求めて就職される方も多い。総合職では、給与に男女の差はないが、企業としても色々努力していかなければならないと考えている。

D 委員 ジェンダーギャップの解消は、必要だと思うが、ジェンダーギャップの解消をしたからといって、人口が増えることに結びつくのは難しいと思う。マイナスの分を減らすことはできるが、プラスの分を増やさないと人口は増えないのではないか。以前、派遣で働いていた男女が、別の場所へ移ったが、縁があり結婚した。その男女が、正社員として働く予定であり、豊岡市の移住者への施策について調べたが、移住を決めた夫婦に対する住宅支援がない。移住したらお金を出す市もあるので、移住者にとって分かりやすい施策があっても良いのではないか。

座長 近くに大都市があれば、安く住む施策やお金で人を動かす施策は、有効かもしれない。しかし、それが、豊岡で有効かどうか。大都市は近くにない。仮に豊岡が周囲から吸収する施策をとった場合、周囲もいずれ枯渇する。そう考えたときに、豊岡は、もっと突き抜けたもので人を呼び込む方がいいと考えている。ただし、移住者への分かりやすい施策は、具体的な作戦の段階で検討したい。

D 委員 市営住宅に入る場合、共働きだと、収入要件がクリアできない。城崎では、二人向けの社宅はほとんどない。例えば、I ターン者の具体的な支援として市営住宅の条件の緩和ができないか。

座長 竹野地域と但東地域の市営住宅では、入居希望者がいないので、移住促進住宅として利用している。他の地域の市営住宅でも移住のためのお試し住宅として転用することができないか検討している。市営住宅は本来の目的もあるので、全域に広げるかどうかは、その折り合いを含めて検討したい。

E 委員 外で働くお母さんだけではなく、家庭で子育てをしっかりとしたいお母さんもいる。豊岡は、かつて鞆の内職で仕事をされていた方が多かった。家庭でしっかりと稼げるしくみをつくることも大切である。手段 0201「働き

がいがあり、働きやすい事業所が増えている」とあるが、事業所だけではないと思う。また、最近、都市と豊岡を行き来されている方も多くなってきている。若い人にとって、豊岡で暮らすことを縛ることは嫌がられると思われるので、上位目的に「豊岡で暮らす価値を認め、豊岡で暮らすことに自信と誇りを持って住む人がふえている」とあるが、「豊岡で暮らす価値」ではなく、「豊岡でも暮らす価値」に変更してはどうか。

事務局 手段 0201 では、事業所を前提としているが、「働きやすい事業所」ではなく、「働く場」に変更してもよいと思う。検討する。

副座長 「豊岡でも」の考え方として、手段 0101 の具体的な活動事例に「関係人口の増加」がある。これまでは、住んでいなければまちの活力としてカウントしないとあったが、まちの活力は様々な人により支えられている。関係人口はその考え方から出てきた。手段 0204 に「市民が多様な人々を受け入れている」とある。定住人口に力点があるが、多様な方々が豊岡に来られ、豊岡で楽しんだり、働いたりする人を歓迎するという意味で市の「豊岡でも」の考え方が含まれている。

座長 手段 0101 の具体的な活動事例として、関係人口とワーケーションが入っている。来年度から本格的に演劇祭が始まる。大人が演劇を楽しんでいる時間に子どもは子どものプログラムを楽しむなどすれば、定住するチャンスにつながるかもしれない。ワーケーションはイメージしにくいかもしれないが、関係人口としてさらに増えるのではないか。

ジェンダーギャップの解消を外の女性にどう PR するのかの課題があるが、解消に向け努力する姿や一緒にしようと感じてもらうことが大切である。そのためには、していることを絶えず情報発信することが必要である。また、発信することで、さらに発信してくれる効果も期待できる。

副座長 神戸市は、住民票を移した方を対象にアンケートを実施された。そして、神戸市と明石市の支援策を比べたところ、それほど差がなかった。しかし、明らかに明石市の方が伝わり、効果が出ている。その差は分かりやすさである。市長が発信したり、国際的にも宣言したりするなど象徴的なことがあればよい。ジェンダーギャップについての取組みが人口増減に直接関係し、女性から選ばれるためには、女性がリーダーとして活躍している姿を具体的に見せることが分かりやすい。実は女性が男性よりも何十倍も活躍して成功させていたのだということがあれば、話題性もあり伝わりやすい。

そうすれば、豊岡のジェンダーギャップの取組みを効果的に発信できる。

F 委員 若者はどの辺を狙われているのか。高校卒業と同時に、都会に出さないようにするのか、1回出て、3年ぐらいで帰っておいでよと言いたいのか、結婚と同時なのか、転職を考えるタイミングなのか、どこを狙うかを決めると、戦略が立てられる。転職のタイミングの人は、即戦力になり、ほしい人材である。そこを狙った何かがあれば、帰ってくるきっかけになる。子どもをもつお母さんは、子どもの食べ物に気を使っている。地方から取り寄せて、毎晩の食卓に出している人もある。近所のお母さんたちは、自分の畑で「枝豆とれたよ」「ピーナッツとれたよ」などと言っておられる。畑は子育てをする上で、これから伸ばしていける分野だと思う。例えば豊岡に移住してきたら、畑がセットになっていたり、コウノトリ育む農法の恩恵が受けられたりすることは、移住を後押しできるものである。さらに、畑作業の時間が「仕事をやっている」と認められると、会社に所属する一歩手前の社会進出になる。アクセサリーを手作りされているお母さん方もあるので、農作物も物々交換や販売などの場があれば、お母さんが社会に所属しているという充実感を得ることになる。

事務局 対象の年齢は、15歳から40歳で想定している。もちろん、高校を卒業し、そのまま就職する方もあるが、Uターン者もある。もっとターゲットを絞れば、さらに細かい設定になると思う。

座長 様々な情報を届けるときには、どこを狙い目なのかを意識して、情報をだしている。技を磨くことが必要である。

畑付きはいいアイデアである。豊岡市の農業委員会は、農地を取得できる要件を緩和している。今後、例えば若い人向けの住宅を作る場合には、畑をセットで考えることを検討したい。市の土地に住宅を作ることはできないが、民間へ一定の条件で市の土地を提供して、その代わりに若い人に住んでもらうことは、十分検討の余地がある。

G 委員 結果として、「子どもたちのふるさとへの愛着が育まれている」「子どもたちが豊岡のことをよく知っている」状態になればいい。その1つがふるさと教育である。すべての小中学校でカリキュラムを決め、実施している。独立行政法人の労働政策研究機構が、2016年のデータを出している。大学生にふるさとへの愛着度について調査したアンケートで、高校時代までに地元企業のことを勉強して、よく知っている子どもたちの愛着度が、87%、

あまり知らない子の愛着度は51%である。将来戻りたいと答えた子は、よく知っている子が64%、知らない子は32%である。まずは、知ることから始めなくてはならない。ふるさと教育では、ただ単に豊岡にある、ひと・こと・ものを知識として知るだけではなく、知ったことをどうやって自分ごととして受け止めて外に出すかということをしている。但東中学校では、東京のアンテナショップで、地元の商品を売り、豊岡の認知度を調べて、課題を捉えている。そして、今度は、そのことを「私たちの270日」と題した劇で発表する。弘道小学校では、学んだことをガイドブックにして、観光協会に置き、自分たちでアピールしている。夢但馬産業フェアに参加した中学生は「但馬には素晴らしい仕事があって、そのことを誇りに思っていて、自分のためだけではなく、まちのために働いている人がいっぱいいるということが分かった」と言っていた。そして、将来但馬で働きたいと思うかの質問では、70%がそう思うと答えている。今、種を蒔いている状態であり、その種まきを丁寧にすることで、帰ってくれば良いと考えている。

H 委員 私自身は田舎が大好きである。子どもの頃に体験した田舎のよさは、ずっと心の奥にあり、たとえ都会に出ても何かの機会に帰ってくると思う。私の次男は、神戸にいたが、「こっちに帰ってくる？」と言ったら、すんなり帰ってきた。田舎に生まれた人の心の中には、必ずふるさとがあり、何かの拍子に帰ってくることがある。そのいちばんの基本は、子どものときに伝統行事に参加したり、山に登ったり、川で遊んだりしたことがすごく心に残っている。

I 委員 第2期の地方創生総合戦略の新たな視点で、以前の案ではジェンダーギャップの解消とあったが、女性に選ばれるまちへに変更されたのは良いと思う。解消という言葉はマイナスのイメージで、男性の視点からいくと、そんなことをしているつもりはないと、少し反発を感じられる方もあるかもしれないが、そうではなく、女性に選ばれるまち、私はさらに特化して、女性に手厚いまちでも良いと思う。男性をないがしろにしているのではなく、仕事場、子育て、地域、高齢の女性の方も活躍し、そういう場を与えているまちであることが端的に皆さんに分かってもらえるようPRをしていただきたい。教育の面においても、豊岡市の学校園の先生のかかっている手は、絶対に都会のお子さんよりも多い。

J 委員 働く場所でのジェンダーギャップの解消は、就職時点で効くのではなく、

就職してからだと思う。しかし、家庭や地域で小さい頃から見えてきたことは残る。家庭や地域の解消がいちばん大変なので、働く場所から手をつけ、社会全体に広げることは良いことだと思う。それから、PRの仕方は突き抜けた方がいいかもしれないが、バランスを取るのが大事だと思う。例えば移住者に手厚くすると、前から住んでいる人たちからの反発があるかもしれない。みんなが大事にされている、そういうまちづくりが大切だと思う。そうでないと、「あそこばかり」「演劇ばかり」となるので、フォローをかなり手厚くしないといけないと思う。

ターゲットを考えると、ここで子育てをしたいと思って帰ってくれるのが一番良いと思う。その状態は、みんなが住みやすいということである。知識としてまちをよく知っていることも必要だが、最終的にはみんなが幸せな中で、自分も大事にされてきたという、記憶があってこそ、帰って子育てをしたいということになると思う。

G 委員 様々なことを行っているが、不易の教育として大切にしているのが、自分は認められている、先生からも認められている、友達からも認められる、そのことによって、自尊感情が育まれ、いつかはできるんだと、何か根拠のない自信を持てるような子どもが育てられれば良いと思っている。心がより幸せになれる、その幸せな子どもの顔を見ている親も幸せになれることが必要であり、究極の目標だと思う。

J 委員 子どもがそう思うには、先に親が幸せでないと、子どもはうまく育たない。親が働く場所で男女ともに認められている。そういう意味でジェンダーギャップの解消は必要だと思う。

座長 自分自身の肯定感や先生が自分のことをちゃんと見てくれているかどうかについて、豊岡は全国平均より優位になってきている。これまでの学校現場や教育委員会の努力が、確実に結果につながってきているので、さらに頑張ってもらいたい。

K 委員 豊岡の事業所や仕事について知る機会がなかったもので、帰ってこなかった人も多いと思う。しかし、今の子どもたちは、小学校のふるさと教育で、豊岡の事業所や仕事について知る機会がたくさんある。中学校では、靴やコウノトリだけではなくて、バネや医療について地域のことを学び、子どもたちの中に浸透している。ふるさと教育は、長い目で見ていただきたい。卒業した時や成人する頃に結果が出ればよいと思っている。

手段 06「結婚したいと思う人が結婚できている」については、今、遠方に住む女性の縁結びを手伝っている。豊岡は自然があり、食べ物もおいしい、人がすごく優しいまちなので、どうしても豊岡に嫁ぎたいとおっしゃっている。豊岡に移住された河合美智子さんも同じである。豊岡がどんなにいいのかを自分の SNS や FM ジャングルで発信していきたい。手段 01 の 0101 の「豊岡の良さが内外に伝わっている」の一部を担っていきたい。

L 委員

「日日是好日」という小説では、「雨を聴く」という項目がある。夏の雨と秋の雨の音の違いを知ることであり、茶道の世界では日本の文化であり、日本の神髄を網羅しているものである。その感性は、ふるさと教育や野生復帰大作戦での激しい雨、カエルの鳴き声を聞くなどの経験から培われる。それが分らないと、日本のよさは分らないと思う。四季の激しい豊岡に身を置き、身近に感じられることは素晴らしいことで、都会の人がほしくても手に入らないものである。豊岡の自然の厳しさは、推しの 1 つの要件でもある。

ジェンダーギャップについては、事業所以外でも解消しないといけない。家庭でも祖父母の世代や地域の方の影響がすごく大きな要素になる。家庭や地域も同様にジェンダーギャップの解消のための施策を考えてほしい。

また、2018 年の 804 人の移住した女性のうち、27 人が外国人となっていることは大きいと思う。今後、専門職大学に外国から入学する学生もあると思うので、さらにジェンダーギャップの解消について、早急に意識改革をしないと摩擦が起きてしまうのではないかと危惧している。

座長

そのような変化をいかに分かりやすく外に伝えるかが大切である。一番説得力があるのは、移住された方々がいろんなところで発信していただくことである。平田さんの劇団は、平田さん自身が移り住んで来られ、すでに何人かが先行的に移住されたが、東京の多くの劇団員が「どんなどころ、どんなどころ」と関心を持っている。そんなチャンネルを通じて、広がっていくこともある。

ジェンダーギャップ解消の一つとして、男性でも女性でも自分で何か新しい業を起こすことも非常に重要なことなのでその体制も整える。相談体制、補助金体制、すぐ事務所を持たない人のためには、事務所代わりに使える場所を作った。一番難しいのが家庭や地域である。今、現状調査を行っており、地域社会のあり方や家庭のあり方に関する戦略を作るための作業を行っている。

外国人は、この 4 月から約 90 人増えている。半年で大きく増えている。

豊岡市は、外国籍の方々をコミュニティの一員として受け入れる。そのためどのようなまちであるべきなのかという視点で物事を考えたい。現在、神戸大学と組んで、豊岡の実態調査をしているが、そこからさらに提言が出てくる。その提言を踏まえた上で、作戦を立てていきたい。

B 委員 戦略体系図の 03 の「いきいきと暮らす女性が増えている」だが、ここには働く女性に特化してあり、働くのではなくて、家で子育てをしっかりとしたいという女性もかなりある。0303 の中に女性にいろんな選択肢があるという視点を入れていただきたい。働いていない女性でも、いろんな選択肢があり、その選択肢の中で、やがて働くことができるような機会があることを入れていただきたい。

子育てセンターでも、ワークイノベーションのいろいろな取り組みが始まる前から、市が主催される女性が働くためのセミナーをしてきた。職員の中には、子育て中のお母さんに働きなさいなんて言えないという意見があったが、職員の中でも変わってきている。変化はあまりにも大きすぎて、ついていけないところもある。お母さん方も同じだと思う。働きたい女性もですが、働くことを選ばない女性にも、もちろん選択肢があるということを入れていただきたい。

ワークイノベーション推進室職員

決して働けと言っているわけではない。3年前の調査で子育て中の働いていない女性の 85%程度が働きたいけど働けていないという実態があり、始めた取組であるので、このような表現になっていると思う。必ずしも働くことだけがいいかたちではないと思うので、表現を検討したい。

G 委員 豊岡の教育は、コミュニケーション教育とふるさと教育、もう1つの柱の英語教育である。英語遊び保育は4年目になり、外国語に対して恥じらいがなく、間違ってもいいから発言できる子どもたちがようやく育ってきたことを実感している。就学前の子どもたちは間違ってもいいから何でも言うので、「Good job」「Good luck」と褒めている。自己肯定感が芽生えてまた発言することを繰り返していい感じで進んできている。いちばん最初に取り組んだ子どもたちが、今、小学校3年生なので、あと8年後、9年後になると、特に英語が話せる豊岡市民が増えてくるはずである。私たちは、その時に、これまでの教育をここまでやってきたと発信するのではなく、こうなりますとわかりやすく PR していく。英語遊び保育は、先進事例がなく、試行錯誤しながら頑張ってきた。全ての園で就学前の子ども

たちが、英語に恥じらいのないときから接し、小学校でしっかりと英語教育をしている実態は、豊岡だけである。このこともきっちり伝え、ふるさと教育、コミュニケーション教育、英語教育を受けた子どもたちが、少しずつ育っている最中であることを伝えていきたい。

座長

これまでの地方創生戦略でやってきたことが、少しずつ形となり始めているが、人口減少に歯止めをかける成果にはつながっていない。むしろ、経済の好調を反映し、昨年あたりは豊岡から転出する人が増えている。しかし、少しずつ形になり始めていることは確かなので、次の戦略の中では、そこをわかりやすく印象的に外に売り出していくことを意識していきたい。豊岡は豊岡のやり方で、よく目立つやり方を考えていきたい。

今日いただいた意見を基に、この戦略の本文や体系図自体を修正するかどうか検討する。また、実際何をやるかという段階で大切な提言をたくさんいただいたので、検討させていただく。策定までに時間があるので、何かあれば意見をだしていただきたい。

今後は、パブリックコメントや市議会での議論を踏まえた上で、最終的に固めたいと思うが、そのことについては、私にご一任をいただきたい。